氏 名 （ 本 籍 ）	五十嵐 泰正
学 位 の 種 類	博士（社会学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2983 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	流動化する現代の都市の多様性―東京都台東区上野地区の事例から―

主 査	筑波大学 教授	博士（人間科学）	土井 隆義
副 査	筑波大学 教授	博士（社会学）	奥山 敏雄
副 査	筑波大学 准教授	博士（国際政治経済学）	明石 純一
副 査	法政大学 教授	博士（社会学）	中筋 直哉

論 文 の 要 旨

本論文は、東京都台東区上野地区のケーススタディを通じ、現代都市の多様性が内包するジレンマについて社会学的な分析と考察をおこなったものである。

現代都市の多様性には２つの位相が混ざっている。すなわち、都市の個性や固有性という言葉で呼ばれる都市・地区間の多様性と、都市住民の社会的属性が多岐にわたるという都市・地区内の多様性である。そしてこの両者はしばしば深刻な対立を招いている。すなわち、都市・地区間の多様性が進むにつれて都市・地区内の多様性は損なわれていく傾向にあり、また都市・地区内の多様性が進むにつれて都市・地区間の多様性は損なわれていく傾向にある。他の都市との相違が際立てば、その都市の独自性が強調されるためその内部では均質化が進むことになり、都市の内部で多様性が進めば、他の都市との相違は目立たなくなるからである。

そこで本論文は、２つの問いを設定することで、このジレンマの実相とその行方について迫っている。すなわち、１）現代の都市において消費され、称揚される多様性の構造を前提としたうえで、都市・地区内の多様性と都市・地区間の多様性の相克に対して、都市住民たちはいかに実践的な水準で折り合いをつけていこうとしてきたのか。２）外部からのイメージや語りの影響を受けながら、都市住民によって表象される地域アイデンティティが複数の含意の間で揺らいでいくとき、それは地域に流入する新たな流入者に対してどのように機能してきたのか。この問１と問２への解答を模索しつつ、本論文の記述は進められている。

本論文では、上記のこの問いを解明するために東京都台東区上野地区をケーススタディの対象として選択している。東京都台東区上野地区は、その歴史的経緯から方向性の異なる多様な都市要素が数多く集積している場所である。そのため、他の都市と比較しても固有性が強く、その意味で都市間の多様性を見るのに適した地区である。また同時に、近年のグローバル化の中で多くの外国人が流入する地域ともなっており、その意味で都市内の多様性を見るのにも適した地区である。

そこで本論文では、この上野地区を具体的な対象とし、上記の問いを解明していくために、次のような構成で分析と考察を進めている。まず第１章では、文化施設が集積する上野の山と、その門前として栄えた上野の街の、江戸時代から 21 世紀までの歩みを概観し、山と街の回遊性の増大という上野の数十年来の地域課題がもつ意味を析出している。なかでも特に、上野の山が常に国家権力と公共空間への流入者とのあいだのせめぎ

あいの場であったこと、江戸時代からの歴史を持つ上野の街が、それぞれの時代にかなり流動的な街であったことを明らかにしている。

次の第２章では、上野の地域アイデンティティを考えるとき、その欠かせない一部となっている下町という言葉の意味を明確化するために、視点をいったん上野から広げて、下町がどのように外部から語られ、観光産業や地方行政の言説の中で、どのように商品化された「下町」として構築されてきたのか、各年代の観光ガイドブックや行政文書を史料として時系列的に確認している。

それを踏まえて第３章では、「下町」という地域アイデンティティが、グローバル化の過程の中で顕現した上野の街の多文化性に対して、排除／包摂のいずれをも正当化する両義的な資源となっていることを論じている。そして、その検討を経て浮上してくるのが、「下町」の重要な構成要素でもあるコミュニティである。そこで、コミュニティが、多様性に富む街の諸課題に対していかなる意味を込めて立ち現れるのか、上野の経営者層への聞き取り調査から明らかにしている。

それに続く第４章では、上野の中でも独特な位置にあるアメ横について論じている。なぜなら、全国的な知名度を誇り、上野の街の顔ともなっているアメ横は、戦後の混乱期に起源をもつ上野では最後発の商店街であり、その成立当初から多文化的だった街だからである。このアメ横について、商売替えを繰り返しながら、「商売の街」としてのアイデンティティを保ち続けてきたユニークな歩みを、文献調査と商店主へのインタビューから明らかにし、曲がり角を迎えているその今後を展望している。

また、上野の各地区の歴史的・実証的分析を経た第５章では、現実の都市の中で多様性を考える際に特に焦点となりやすい防犯や道路利用といった領域を中心に、都市・地区内の多様性と都市・地区間の多様性の相克という論点について、上野の現実に即して実践的に再考し、理念的・規範的な議論にとどまらない考察を行なっている。それは、上野がいかなる街であり、この街が何を守ってどこを目指していかなければいけないのか、その核心を探求することに直結する考察でもある。

そして最後の結章において、これらの分析と考察にもとづきながら、上記の問いに対する解答を導いている。まず問１に対する本論文の解答は次のとおりである。都市における多様性の２側面の相克を解消するには、文化的な意味でのゾーニングが一定程度は避けられない。混交的な地区の実態と乖離する弊害がある上に、いかにしてもゾーニング不可能な文化的堆積がある地区も上野には存在し、その筆頭が歓楽街の２丁目仲町通りである。この地区では、過度な客引きの存在が来街者の多様性を失わせ、結果として地区内の店舗構成の多様性が失われている現実がある。したがって、それを抑止することが防犯パトロールの目的の一つとされている。

このことは、多様性に富む都市空間でこそ、取締りなどの一定程度の介入、すなわち多様性のマネジメントが必要であるというパラドクスがあることを示唆している。そこで重要となるのは、その介入の主体が誰になるのかという点である。そこで本論文では、上野における地域と警察との関係性の変遷を描写したうえで、自らの街という意識を高めるのみならず、杓子定規に法律が適用されて地域の魅力の一端である商習慣が失われることを避けるためにも、コミュニティが主体となった介入を行うことの重要性が指摘されている。そして、コミュニティが大きくコミットする形で各通りや地区のガバナンスに乗り出すことは、多様性のマネジメントに不可欠ながら弊害も懸念されるゾーニングをボトムアップ型で達成し、結果として地区間の多様性の保持をも帰結し得るのではないかと考察している。

次に、上記の問２に対する本論文の解答は次のとおりである。外部から付与されるナラティブと内部で構築されるストーリーの相互作用として表出する地域アイデンティティは、その内部に揺らぎをはらみながら、東京東部の中心的な繁華街である上野で大きな影響力を持つ「下町」という言葉をめぐって顕在化していく。この「下町」が商品化されていく中で、そこに込められた意味の力点は短期間のうちに移り変わっている。「下町」は誰かが明快に定義するような言葉ではないため、複数の意味が現在でも併存し、それを自らの地域アイ

デンティティとして受け入れている人々のあいだでも、その解釈は曖昧に揺らいでいる。

外部で商品として構築された「下町」は、流動的な環境にある実際の人々にどのように表象されているのか。本論文の分析から、それが歴史性・固有性に引き付けられて解釈される場合には、外部からの流入者に対して排除的に、そして大衆性・下層性に引き付けられて解釈される場合には、外部からの流入者に対して包摂的に作用していることが明らかになった。下町アイデンティティは、全く異なる態度をどちらも正当化する資源となりうるのである。さらに、現在の下町アイデンティティの最大公約数的な要素と言えるコミュニティは、地域の相互扶助的な伝統を喚起させ、流入者に対して包摂的に機能する一方で、この街に「骨をうずめる」覚悟を持ったコミュニティの一員であれという形で「街全体のことを考える」意識の薄い流動的な流入者に対しては排除的な規範としても機能している。このような両義性も本論文が明らかにしえた知見の一つである。

審　査　の　要　旨

１　批評

本論文は、上野という街についてのモノグラフである。しかし、それにとどまらない射程をも有している。上野という街は、それぞれの時代で伝統や固有性と流動性とがせめぎあう歴史を歩んだ結果として、相互に大きく方向性の異なる豊かな魅力や資源を持っている。そのため、グローバル化がもたらす異質性の増大にも複雑な反応を示している。したがって、上野という街を現代都市の一つの典型と捉えることも可能である。

本論文は、上野という街の歴史的変化について、その具体的な文脈へと膨大な時間をかけて分け入っており、その結果、現在へと至る諸変化のなかで地域住民たちが模索を繰り返してきた折り合いの様相を生き生きと描き出している。したがって、そこから得られた知見は、都市社会学の従来の知見に対して新たな視座を付け加えているともいえ、その含意が示唆するところは大きい。さまざまな形で多様性が焦点化される現代都市を考える際に、その社会学的考察へと一般化しうるだけのじゅうぶんな知見を含んでいるといえる。

もちろん本論文に残された課題も大きい。とりわけ本論文の中で扱われているオーセンティシティとアイデンティティの概念をさらに吟味し、両者の相克が意味することをさらに明確化する作業は、今後かならず必要になると考えられる。都市間の多様性と都市内の多様性をめぐる相克という社会現象を解明していくにあたって、オーセンティシティとアイデンティティの具体的な実像を明らかにする作業は避けて通れないものであるが、それは地域住民たちの活動への参与観察やインタビュー等を通じて行なわれるだけでなく、歴史的事物とその表象をめぐる記録を通じても行なわれるべきものであろう。

上記のような限界は見られるものの、先述したようにそれ以上に本論文の社会学的意義は大きく、博士号を付与するに十分な研究業績であると評価する。

２　最終試験

2021 年 1 月 19 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除した。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定した。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。